

研究者であることと、研究者を(仮)卒業した研究者となることとの間で思うこと

岡田 憲夫

京都大学防災研究所を定年退職するちょうど一年前に起こった東日本大震災は、これまでの研究生活に曲がりなりにも一つの区切りをつけようと出口のすぐそばまで来ていたつもの一防災研究者の私に大きな卒業(定年退職)課題を投げつけた。

地球のいとなみが秘めるすさまじい大災害を、「人智を超えるできごと」と言い訳することは、「人智として防災を研究することを生業としている者」の一人として許されることなのか？ なるほど私は防災研究者であっても、地球や自然の摂理として災害ハザードがどのように起こり得るのかということについて、人智を探求して来た者ではない。その意味では素人に近い。(この方面であっても単なる素人であってはいけないと常に言い聞かせてはいるのだが...) しかし社会や人間の側の脆さや拙さが格別の災害ハザードをさらに格段の被害に導いてしまう可能性があること、それに対して人智を尽くすことについてはどうか？ 私はまぎれもなくそのことでは専門家たろうと努めてきたはずではないか？ そのような人智をどこまで尽くすべく私は研鑽に務めてきたのであろうか？ いや、一人ではできることはたかが知れている。ではそのように思う仲間とどこまで人智を尽くしあう協働作業を成し得てきたのであろうか？

確かに今回の震災は、ますます「防災の総合的取り組み」が大切であることを明確に物語っている。そう私も私たちの仲間もそう言い続けてきた。いや、そう思ったからこそ、ささやかでも「総合防災」という学際的で国際的な新研究領域を築く努力を重ねてきた。それはたとえば国際総合防災学会(IDRiM Society)という形をとってささやかでも実を結びつつある。しかし、今これほど「防災の総合的取り組み」が目前で求められているにも関わらず現実はどうだ？ いや、少しの救いはある。テレビでも報じられている、私たちによらないいくつかの例外的成功事例がそうかもしれない。しかしそれについても多角的な検証が必要だ。やはり私たちの「総合防災の人智」が直ちに結びつかないことから起こっている数々の問題が噴出し始めているようだ。

これはつまるところ「人智を尽くす」ことが防災に関する限り、こういう構造になっていて、そこを突破できないからではなからうか？ それは「人智(タイプ A)が実践にむすびつくように人智(タイプ B)を尽くす」という<二重の人智を尽くすこと>が求められているという構造のことである。もう少し厳密に言えば、「人智を尽くす」ということはおよそ無理難題ではないか」という言い訳を自らに許さないためには、小さくても逃げ場のない現場で、<二重の人智を検証するプロセスを一つひとつ完結させて、これを繰り返すこと>。それが総合防災の研究態度の要めとなりえるのか、という問題が立ちはだかっているのだ。たとえば、東北の被災地の災害復興まちづくりがその典型的問題であろう。簡単に足を運ぶことが叶わない距離にある場所にある被災地のこと。しかも今からの即席的实践では心もとない。ならば東日本で起こっていることを少しでも継続的に学びつつ、身近な西日本のどこかで小さくても逃げ場のない現場を見つけて小さな実践をすることはできるのか？

一年前に突然課された大きな卒業(定年退職)課題を未解決にしたまま、仮卒業させてもらったような心持ちである私は、故郷の京都大学防災研究所が「総合防災」研究のフロンティアであることを切に祈る一方で、研究者であることと、研究者を(仮)卒業した研究者であることとの間で、新しい生き方を模索している。